2020年8月31日（月）苫小牧民報

鵡川高野球部 次期監督に小池氏

来春から指揮「逃げずに戦う覚悟」

来春から鵡川高野球部の監督に就任する小池氏（左から2人目）と鬼海現監督（右）

むかわ町は30日、鵡川高校で会見を開き、来年度から同校野球部の次期監督として、前旭川南高監督で鵡川高でも部長の経験を持つ小池啓之氏（68）を迎え入れると発表した。現監督の鬼海将一氏（36）が来年3月限りで退任することを既に表明しており、小池氏は来年4月から指揮を執る。小池氏は「あくまで目標は甲子園出場。最後の力を振り絞り、気持ちだけは失わずにやっていく」と決意表明した。

小池氏は東京都出身。兵庫県の市立尼崎高、駒沢大を経て、1977年から旭川龍谷高コーチ、監督を歴任。コーチで78年、監督として83年に同校の夏の甲子園出場を果たした。98年に赴任の鵡川高で部長を務め、昨年8月に死去した佐藤茂富氏（享年79）と共に2002年春、21世紀枠でセンバツ甲子園出場に導くなど強豪校の礎を築いた。旭川南高では07年春にセンバツに出場し、17年夏に勇退した。

鬼海氏の意向を受け、同校や町は後任について協議し、小池氏への打診を決めた。同日の会見に同席した竹中喜之町長は「2年を目安に生徒指導はもちろん、今後の指導者の育成をお願いしている」と説明。「まだ晩年という表現は当てはまらない。小池先生のネクストワンをぜひこの鵡川高校で育んでいただきたい」と期待を寄せた。

前日、札幌市内にある佐藤氏のお墓に手を合わせ、監督打診を引き受けたことを報告した。「泥だらけの戦いが始まるが、逃げずに戦う覚悟で受けた」と思いを語り、「あずかる生徒が卒業した時に胸を張って親御さんの元へ返せるようにするため、生徒との信頼関係を築いていきたい」と意欲を示した。

また来春、退任する鬼海監督は「秋の全道優勝、来夏の甲子園出場を目標に新チームがスタートしている。残りの期間も変わらず、僕のイズムを同じようにやっていく」と話した。

小池次期監督 一問一答

生徒と共に人間力向上

来春から鵡川高校野球部の監督として指揮を執る小池啓之氏と報道陣との一問一答は次の通り。

―監督打診を受けて。

「自分の中では、3年前に現場に一区切りを付けたと思っていたので、驚き以外にない。竹中町長から話を受けた時、熱意と鵡川高校野球部に対する愛情を感じたし、以前、鵡川高野球部に携わってきた人間としてうれしいこと。心を動かされ、覚悟を決めなければいけないという気持ちになった」

―当時と比べて現状の野球部の印象は。

「変わったと思うのは、今の子たちはあまり自信がないと感じたこと。ただ、野球に取り組む姿勢やひたむきさは鬼海監督がしっかり受け継いでいる。時間が許す限りだが、1～2カ月くらいに1度来た時に1～2時間割いて生徒たちと話をすることがあるが、真剣に聞いている。特に今の3年生は震災の後のことの話を聞いて勉強になった」

―昨年、佐藤茂富元監督が亡くなったことも影響はあったか。

「もし、茂富先生が亡くなっていなかったら、鬼海監督も決断はしなかったと思う。そういう意味で一つの大きな転機だったのでは。でも、まさかその後任の話がこちらにくるとは考えもしなかった」

―（むかわ町は）2年を目途にと言っている。

「僕が高齢ということで（町が）気を使ってくれたのだと思う。ただ、やっている間は言い訳なしに甲子園を狙わなければ、子どもたちが何も得られずに終わってしまう。親御さんとの約束もあるし、後進の指導者を育てながらやっていきたい。2年は自分の体の方も持ってくれ、という思いで。高校野球の指導者を2年ではやめられないという思いはある。町が許してくれるのであれば、そこは覚悟している」

―4月に就任するまでの間、チームへの関わり方は。

「そこまでは鬼海監督がやるので心配していない。まずは鬼海監督が高校野球の指導者としてしっかり足跡を残していけるか。後始末は任せておけという思い。全面的に信頼しているので、彼の残した跡を基礎にして、新チームを指導していきたい」

―小池監督として、どういう戦い方を目指す。

「今まで全国でも、鵡川高でも、旭川南高でもやっているのでスタイルが変わることはない。その時の選手層によっていろんな形がある。ただ、一番大事なのは人間力の向上。私もこの2、3年、現場を離れて自分自身を見詰め直した時に、自分自身が非常に未熟な人間だと感じた。この機会に生徒たちと一緒に少しでも高めていければ。そうでないと、僕の言葉は生徒には伝わらないと思う。そこは時代が変わってもぶれない。本塁打を打つとか、速い球を投げるとか、野球が上手であっても、普段の生活がいいかげんな生徒は意地でも使わない」